

2014（平成 26）年度 経営学部自己点検・評価報告書 ラーニング・アウトカムズの測定状況

◎経営学部では 2014（平成 26）年度において、評価基準の検討、ラーニング・アウトカムズ（LOs）の測定、成果の可視化とエビデンスの蓄積につき、次のような自己点検活動を行った。

【1】後期の 1 年生ガイダンスで前期振り返りアンケート実施（授業外学習時間、TOEIC の現状把握と目標設定）→授業外学習時間週平均 9.5 時間、TOEIC の目標平均 507 点と高い目標値を得た。

1 年後期の時点で、授業外学習時間の増加と TOEIC の目標達成への意識向上の目的もあり、後期ガイダンス時に参加者にアンケートを初めて実施した。後期授業アンケートの結果と照らし合わせ、今年度の意識向上の取り組みが効果的であったか検証したい。

【2】LOs 測定と検討（直接的エビデンスである各種試験のスコアの推移と、アンケートなどの間接的エビデンスの蓄積）の実施

（1）1 年次プロフェッショナルコースの導入科目「中級簿記」（60 名履修）での日商簿記 2 級・3 級受験啓蒙（2015 年 2 月 22 日検定受験）で成果把握・分析。

1 年次グローバルビジネスリーダーコースの導入科目である「IGBL」（150 名）2015 年 12 月 20 日の TOEIC スコア受験啓蒙とスコアの把握・分析。経営学部受験者数は以下の通りであり、1 年次の入学定員が 250 名から 200 名に減少下にもかかわらず、年末の受験者 300 名から 360 名へと大幅に増加した。なかでも、1 年次の入学定員が 250 から 200 に減少したにもかかわらず、受験者数が 120（学年の全体比 46%）から 126（学年の全体比 60%）に増えた。

TOEIC 学内試験受験者数の推移

（人）

	2014 年 12 月	2015 年 12 月
経営学部全体	300	360
1 年次	120	126（定員が 50 減）
2 年次	74	98
3 年次	44	84
4 年次以上	62	52

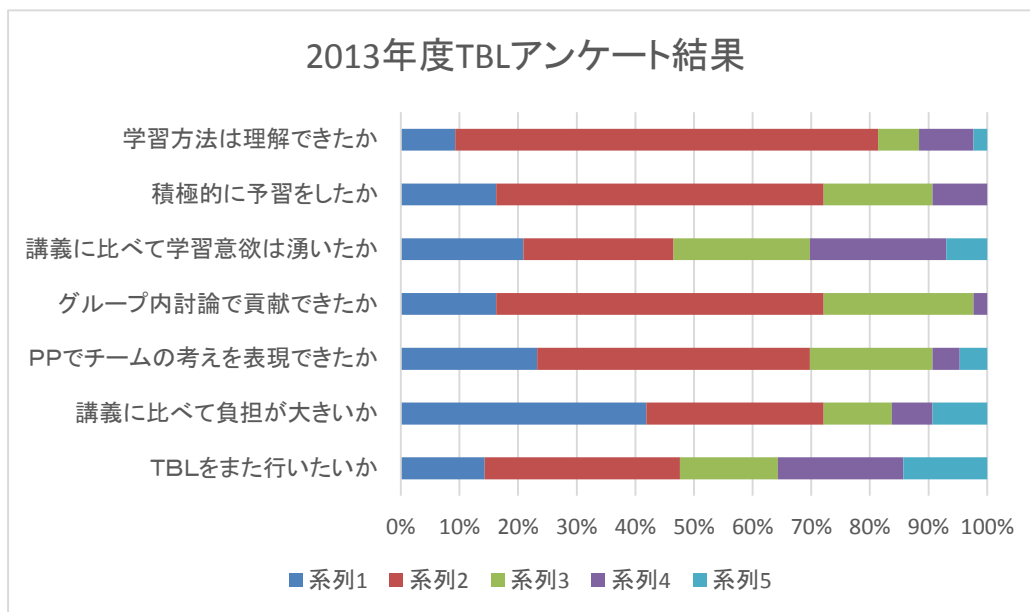
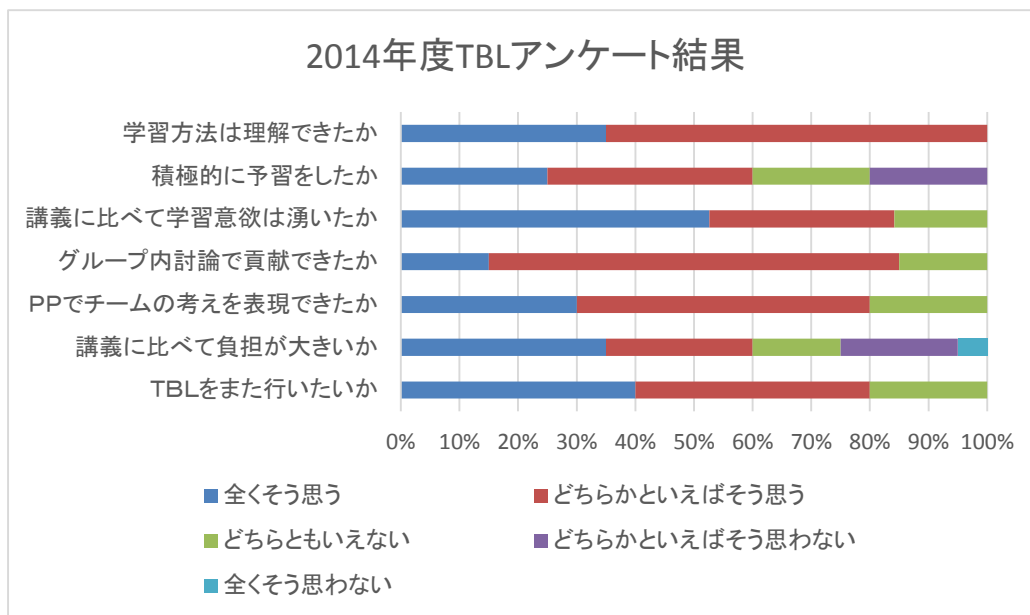
1 月 14 日の 1 年生の授業（1 年生 150 名履修・上級生 40 名履修）で、今までの最高得点から今回何点スコアが上昇したかということに基づいて 15 のグループでコンペティションを行った。

15 のグループで上位 5 人ずつ集計し競ったところ、平均 98 点の上昇があり、トップのグループは一人平均 154 点上がった。受験者の中では、200 点台だったのが、500 点台に上がった学生もいた。

細かな分析は、WLC のデータの取りまとめを待ちたい。

（2）専門基礎演習における T B L（Team Based Learning）の導入の効果測定

山中教授担当の専門基礎演習では、TBLを導入してその学習効果の測定を実施している。その結果は次の通りである。



昨年度と今年度の授業へのTBL終了後にTBL学習についてアンケート調査を行った。その結果、大幅な学習意欲の向上が裏付けられた。問い「講義に比べて学習意欲は湧いたか」は前年度46.5%から84.2%に上昇。「TBLをまた行いたい」は前年度47.6%から80.0%に上昇した。一方「講義に比べて負担が大きい」は前年度72.1%であったものが今年度60.0%と減少している。授業へのモチベーションの向上は授業外学習への意欲も駆り立てていることが示されている。

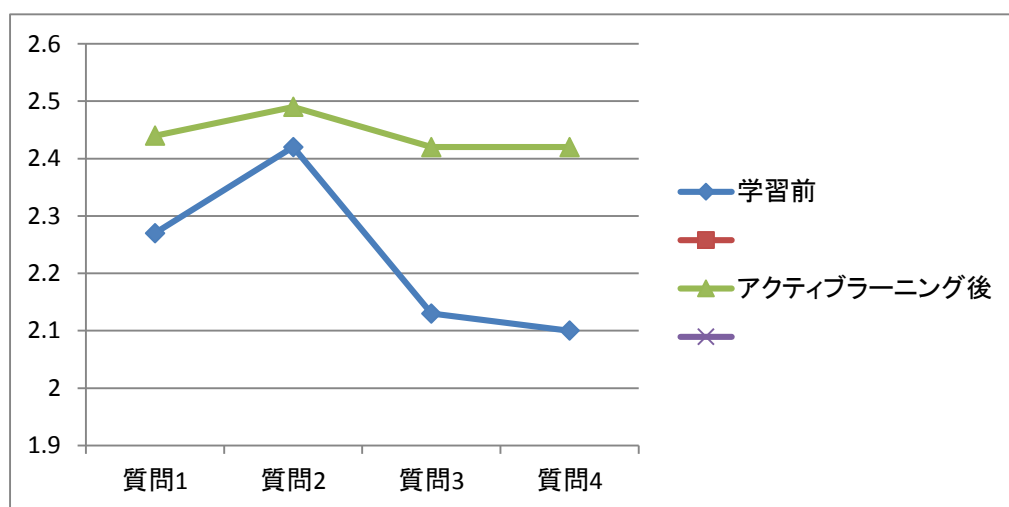
(3) 企業見学や会計学（平岡）、人間主義経営論Ⅱ（栗山）の理解度アンケート調査の実施

そのうち人間主義経営Ⅱのアンケート結果の速報値を見る。これは授業の中間時点と終了時点の理解度の進展につきアンケート調査を実施したものである。関心度、理解度、説明力、問題解決力の全

て数値が上昇。問題解決力の項目が最も高かった。

表： 人間主義経営論Ⅱにおけるアクティブラーニングの効果(回答数 78、2014 年 12 月 18 日実施)

	学習前	アクティブラーニング後
質問 1 関心度	2.27	2.44
質問 2 理解度	2.42	2.49
質問 3 説明力	2.13	2.42
質問 4 問題解決力	2.1	2.42



(4) 卒業研究のルーブリックに基づく評価の検討

1月28日の学部教務委員会で策定案を示し、1月14日の教授会で文書内容を承認した。添付資料として文書末を参照)

【3】カリキュラムの点検 学部のDPに照らして、整合性のある評価基準を検討するため、学部教務委員会でカリキュラム・チェックリストをReviewし、シラバスを点検した(専門科目のシラバスをテキスト・マイニングするなど)。今後、専門領域・テーマごとのクラスターの整備をするにあたって、分野ごとに点検をすることになっている。

【4】AP事業の実施によるアクティブ・ラーニングの実施

AP事業において、アクティブ・ラーニングの質的向上とラーニング・アウトカム測定に係わる学部授業への導入を実施した。6科目において新たにSAを投入し、グループワークなどのアクティブ・ラーニングの実施と、授業アンケートを通じ授業外学習時間の増加などの効果測定をする。

授業アンケート結果のとりまとめ作業を行い、効果測定の点検を行う。

【5】経営基礎演習等の検討

1年前期の経営基礎演習における評価基準の再検討と、2年前期の人間主義経営演習における就業

カテストの結果の活用、ラーニング・アウトカムズの基準測定の検討を行う。学部のアクティブラーニング推進チームを中心に、来年度に向け、基準の設定と測定を行う。

【6】学部内FDの開催

学部教授会後に、教育手法の向上を狙いとしたミニFDを3回開催。また学部独自に教育手法の向上と共有を目的に11月と12月に学部FD研究会を開催（プロジェクトマネジメントの教育手法と海外ビジネススクールの教育手法）した。

また、AP事業として、アクティブラーニングの導入と測定のために、1月7日学部推進チーム（栗山、中村、山中、平岡）が、ファシリテーション研修（学内で1日研修）、1月26日、27日アクションラーニング研修（都心で2日間）を行った。また、3月26日から28日まで2泊3日の合宿研修に学部教員全員参加で研修を行う。

添付資料：

ゼミ卒論（卒業研究）の評価基準の例（案）

3段階で評価 経営学部のラーニング・アウトカムズとの関係で設定する。

5点 非常に良い 4点 概ね妥当である 3点 少し不十分である

評価基準：

- ①テーマ設定の着眼点
- ②先行研究のサーベイ
- ③論理性
- ④オリジナリティと研究の発展性
- ⑤形式と参考文献

経営学部のラーニング・アウトカムズとの対応関係

①は「人間主義経営について理解している」「社会の中から経営分野に関する問題・課題を発見できる」「企業の社会的責任を理解できる」に対応。

②は「現代経営に必要な基礎的知識を有している」「ビジネス英語を活用するための基礎的な知識を持っている」「ICTなどを活用してデータを収集・分析し、その結果を理解できる」に対応。

③は研究過程でのプレゼンやディスカッションの内容が「発見した問題・課題を適切に伝えることができる」「チームで能動的に活動し、ディスカッションできる」に対応、最終的に完成した研究は「発見した問題・課題を適切に伝えることができる」「多面的・論理的に思考し、それを表現できる」に対応。

④は「人間主義経営について理解している」「企業の経営の仕組みを理解している」「経営の基礎的な知識を活用できる」「社会の中から経営分野に関する問題・課題を発見できる」「発見した問題・課題を適切に伝えることができる」「企業の社会的責任を理解できる」「ICTなどを活用してデータを収集・分析し、その結果を理解できる」「多面的・論理的に思考し、それを表現できる」に対応。

⑤は、標準的な形式と参考文献の書き方のルールが守られているかで判断。